

〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

## 「女性の生きづらさ」の議論を始めよう

1979年に作成されたスペースホラー映画「エイリアン」は瞬く間にヒットした。日本でも大人気だったことは当時を知っている人なら記憶にあるはずだ。この映画のヒットの要因の一つとしてあげられたのが、「主人公が女性である」ということであった。それまではホラー映画では、通常は「被害者」の立場になっていた女性が、この作品では子どもを守るために敢然とエイリアンに立ち向かっていくのだ。(男性陣はみんな、エイリアンにあっけなくやられてしまう…)この華奢な女性が戦う姿に、拍手が送られた。しかし、振り返ってみるとこの作品での主人公の強さは、子どもを守る「母親的」な強さであり、女性の社会的役どころが「母親」であることが強調されていたように思う。この映画から数年後に日本で公開されたアニメが「風の谷のナウシカ」である。ナウシカは、人類が破壊し尽くした地上で細々と生きる人間と、森(虫)という人間が立ち入れない世界との境界を行き来しながら、共存関係をはかる中で未来の可能性を信じる存在として描かれる。ナウシカや虫たちが相手とする巨神兵は、地上を破壊した存在であり、男性・戦い・愚かさを象徴する。面白いのは、この巨神兵を操ろうとするのがこれまた女性なのだ。「風の谷のナウシカ」は、男性の社会を牛耳って破壊に向かおうとする女性と、様々な境界を乗り越えながら共存することに豊かさを見いだそうとする女性との戦いの物語、と見て取ることもできる。そして、1990年代に登場して世界中の子どもたちから賞賛されたのが「セーラームーン」である(この解釈はここではおいておこう……。)。このように映画やアニメの中では、女性の存在はその位置づけは大きく変化した。現実の社会ではどうだろうか。

確かに少し昔のように、「家」に女性を縛り付けるような力は弱くなったし、さすがに「良妻賢母」を女性の理想とするような声も、以前よりは小さくなっている。中学校でも、家庭科や技術科、保健体育は男女共修になったし、働く女性も増えている。では女性の生きづらさは解消されつつあるのだろうか? いや、そうは思えない。むしろ「良妻賢母」としてその存在を家に縛り付けられていたときよりも、もっと見えにくい形でおとしめられているように思える。それは、「社会の不具合を調整する安全弁」として使われるようになったのではないかなと思うからである。

例えば、現在のコロナ禍で全国の保育所の休園が相次いでいる(327園 1月25日付 東京新聞)。大阪市の松井市長は「自宅で保育が可能な家庭は3週間程度登園を自粛するよう」要請した(1月21日)。コロナ禍で保育所の休園ということはあり得ることだとは思っている。しかし、そもそも社会問題であるコロナから派生する問題を、家庭での解消が求められるという事態に直面しているわけだが、さて、こうなると大多数の家庭で女性が動員されることになる。自分が仕事を休んで面倒見るか、知人や実家の父母に頼むか、それらを組み合わせで対処するか、そうした調整はほぼ女性の役割となる。なぜだろう。それは、夫よりも妻の方が仕事を休みやすいからだ。「俺仕事休めないから、オマエが仕事休んで面倒見てくれよ…」。こんな会話が、どこの家庭からも聞こえてきそうである。こうして、社会的課題であるコロナ禍における保育所の休園問題は、各家庭からの女性の動員によって解決を見るのである。以上は、直近のコロナにおける保育問題だが、女性が動員されて社会問題が社会問題化されない構造はなんにも保育に限ったことではない。高齢化社会に伴う介護の問題なども同様である。これだけクローズアップされてきた問題であっても、根本的には「家庭の問題」として、多くは女性が仕事を辞めたりして担っているのが現状である。まさに、「社会的不具合の調整弁」という扱いである。老人たちも、家族の女性に甘えずに、そろそろ「一揆を起こせ」とは言わないまでも、「老人党」でもつくって国会に乱入し、「金持ちではない高齢者保護法をつくれ」とでも突き上げればいいのにと思ったりもする。(でも現在の政党も、ずいぶんと年取った人が威張っているから、なんともならないかな…)

それではなぜ、女性の方が男性と比べて仕事を休みやすいのか。皆さんご存じのように、女性の多くの就労形態が非正規短時間労働であるからだ。つまり、パートである。男性(夫)の収入では足りない分、補助的な収入を得るために、女性(妻)がパートに従事する。税金のことを考えながら、非課税の限度ぎりぎりでも勤めようとするのも、パートの女性にとっては常識だ。家庭を持ちながら、こうしたパート労働に出る女性は明らかに増えてきているが、これを女性の社会参加が進んだからだとはとらえられない。それよりも、産業界が安い労働力として女性に目をつけたからだと理解するべきである。

日本社会も高度経済成長まではどんどん働く人の賃金が上昇した。男性ひとりの給料で妻と子という家族を十分養うことができた。「男は外で、女は家庭で」ということが、正当な役割分担としての家族像を作っていた。夫の賃金は、妻の家庭労働の分もカバーされているとさえ言われていた。「お疲れ様でした」と、給料日に給料袋を夫からもらう妻の姿が、円満な家庭の一つの象徴的図柄になっていた。しかし、高度経済成長が過ぎると様子は一変する。産業界はこぞって賃金抑制へとシフトしたのだ。それまでは「高品質」を誇っていた日本企業も、安い労働力を求めて海外へ工場を出し、日本の産業の空洞化が始まった。



盛んに日本人の賃金の高さが喧伝され、男性ひとりが妻の分まで2人分の賃金をもらっていると、ネガティブキャンペーンが張られ、これによって、企業は賃金を下げて生産性を上げようとした。賃金という原価が下がれば、製品はより安くできる。こうした過程で、より安い労働形態として非正規雇用やパートが注目される。「労働者」としての保障をする必要がないとされ、より安価、そして会社の都合で人員を減らしたり増やしたりに使われるのである。まさしく「使い勝手がいい労働者」なのである。ここに女性は誘導されていく。先ほど述べた非課税措置なども、短時間のパート労働を推奨する「撒き餌」のようなものである。決して女性がパート労働を「望んで」いるわけではない。①夫の収入が増えず、足りない分の補助的な収入が欲しい。男性賃金の低下が背景。②育児や介護など、女性が多く担わされている役割に対する公的扶助が日本は少ない。正規で女性が働く環境がそろっていない。③出産や育児などにより、キャリアの蓄積が保障されないので、望む仕事に就けない。こうして、安い賃金でパートとして働き、社会的な課題には動員される便利(?)な存在となっていくのだ。

ちなみに、企業での賃金上昇は今後も見込めない。先進国といわれる国の中でも、日本は賃金の低い国となってしまったことはご存じだろう。企業は今必死で「企業価値」をあげようとする。企業価値とは株価のことだ。内部留保や生産性を投資家たちがどう評価するか。賃金を多く払って、その分収益が下がるなら株価も下がる。会社は社員のものではない、株主のものなのだ。日本の労働者の半分近くが非正規雇用になってしまったのも頷ける。しかし、本当にこのままでいいのだろうか。

こうして安い労働力へと誘導された女性にとって、この問題が女性の社会的自立を阻む一番の壁となる。つまり、自分ひとりの働きで、一生を終えるまで生活できるだけの収入を得られるかが、はなはだ疑問だからである。こうなると道は一般的には二つしかない。

一つ目は、男性への経済的依存をはかることだ。家庭を持って、夫の年収によっては、または子育てのために必要であればパートなどの限定的な収入を得て、家計を補完していくというやり方だ。俗に言う「女の幸せ」は概してこのような形態に属していく。しかし、本当に幸せかどうかはわからない。この裏側には、幸せな家族像がへばりついていて、必死になって「幸せ家族」の演出が必要となってくる。夫との関係はあくまでも従属的である可能性が高く、子育てや他のことに自己表出をはからなければならなくなる。まして、離婚でしようものなら、経済的基盤はゼロに等しく、子どもを引き取ることもケースとしては多く見られ、生活と育児に追い詰められていく。シングル家庭において、ネグレクトなどの虐待が多いこともうなずける。精神的にも相当な負荷がかかることになる。



二つ目は、意を決してひとりでの自立的なおくことだ。当然ここにも賃金の低さが大きな足かせとなる。まして、病気などでいったんキャリアが切れると、転職は常に下方へと修正されることになる。肉体労働ができる男性などは、少々のブランクがあっても、もとの職に場所を変えてでも戻ることが可能だが、女性はなかなかそうはいかない。こうなると、精神的に頼れる相手もいない孤独や、将来への不安を強く感じずにはいられない。

もちろん、第三の道もある。男性に負けない技能や知識を身につけて、競争に打ち勝ち、高収入を得ることであるが、それは一部の女性に当てはまることとしてここでは省く。社会的自立とは、競争に勝った人のためでも、一部の人のためであってはならない。すべての人に可能でなければならないと考えるからである。

どの道も大変である。学校では、男女平等と教える。しかし、こうしてじっくりと考えてみると、女性の自立の道はほとんど難しいといわざるを得ない。Ed.ベン便りの前号で紹介した、女性の自殺やうつ病の発症率が高い傾向は、以上述べてきたような事情が、一人ひとりの女性の裏側に隠れているように思われる。多様性やインクルーシブが声高に叫ばれるようになったが、多様性やインクルーシブは、違いのある、お互いの人権を相互に保障することから始まる。しかし、もっとも手前の、私たちのすぐ足下にある女性の生きづらさに関わる問題を解決することなしには、未来は先細って行くに違いない。社会の巧妙な「からくり」に利用されてきた女性の問題について、様々な角度から議論を始めたい。

Ed.ベンチャーは、今年の活動の核にこの問題を取り上げます。それぞれの場所から参加を・・・!



## 教育講演会 ONLINE 開催に変更

対面での開催を予定していましたが、新型コロナウイルスのオミクロン株の拡大を受けて、感染防止の観点から、オンライン開催に変更いたしました。

参加を希望される方は、2月15日までに、[toiawase@edventure.jp](mailto:toiawase@edventure.jp)まで、ご連絡ください。参加方法をご案内いたします。

## 総会 ONLINE に変更

教育講演会と同日に開催される総会もオンラインに変更になります。

議決権をお持ちの正会員のみなさまは、メールで、2月12日までに、参加もしくは委任のいずれかをお知らせください。

【理事のつぶやき】痛ましい事件のニュースが相次いでいる。なぜ?と思う。私たちの日常が、気づかぬうちに变质してしまったからではないのか。「速く、すぐに」と結果を求められ、常に「競争」に駆り立てられている日常。人が育っていく事、人を育てるという事は、ゆっくりとした営みなのに。日の光を浴び、風の音に耳を傾け、雲の流れに見入るそんなゆったりした時間をちょっとでもいいから見失わないようにすることが大事ではないだろうか。(NJ)